

2011年11月23日

M1 倉持 定男

## 小倉ゼミナール 11月定例ゼミ報告

### I 事務報告

1. 日時 2011年11月12日(土) 10:00~18:00
2. 場所 放送大学 文京学習センター 講義室(3階)
3. 出席者 小倉行雄 先生  
修了生 菅さん、陶山さん  
M2 森さん、久保さん、神谷さん、野崎さん、高橋さん  
M1 牛山さん、坂井さん、杉山さん、倉持  
学部 文さん、君塚さん 13人  
(株)ブロックス 三宅プロデューサー、カメラ担当の方) 総計16人

### II ゼミの内容

#### 1. 小倉先生のオリエンテーション

まず、なぜゼミの前に宿題を出すのか。それは、ゼミ生にゼミ内容の事前告知をする。これにより、次のゼミではどんなことを学ぶか、ゼミ生があらかじめ考えるように仕向けるためである。

放送大学は、通信教育制の大学院である。したがって、ゼミ生が一堂に会する機会は非常に少ない。つまり、ゼミ生にとって制約条件は多く、ゼミの準備にあたってあまり時間はかけられないのが一般である。それだけに、ゼミ生が各回のゼミからささやかでも成果を持ち帰るとしたら、ゼミでやることについて自分なりの目的や狙い、さらには評価軸を持って参加しないとイケない。ところが、ゼミ生が自分なりの目的や狙い、評価軸を考えてゼミに臨むのは容易でない。このため、1週間前に宿題を出すのである。つまり、これができるれば、ゼミへの参加は非常に有意義になる。

また、ゼミでは、いきなり学術的価値のある論文を書くことを目指すというより、まずは仕事力のベースとなるものの構築を図ることに力点を置く。仕事力が向上すれば、論文も書けるようになる。仕事力のベースの向上のために、先生のやり方のポイントをとらえ、真似して、自分のものにするのである。

では、もう少し具体的に小倉ゼミでは何をを目指すのか。これは以下のとおりである。

(1) 小倉ゼミでは何を指すのか

①放送大学のこれまでのゼミは標準にしない

放送大学のゼミは「こんなもの」という世間常識をひっくり返す。

②外へ持っていけるものをつくる

この場合、客観的な評価軸が大事になる。

③勝負する

自分の力を伸ばす上では、真剣勝負をすることが一番たしかな途である。

次に、小倉ゼミにおける学びの方法は、どのようなものか。これは社会人に適した学びの方法であり、以下のようなものである。

(2) 小倉ゼミにおける学びの方法

①五感を生かして学ぶ

「みる」「きく」「よむ」「はなす」「かく」

②現場的に学ぶ

ワークショップ型の授業

毎回のゼミのやり方をみよ！

③考える方法の構築の重視

2. 久保さんの講義（ワークショップ型授業）

11月ゼミでは、10月定例ゼミの午前中に限定した「授業報告」の作成を宿題にした。この授業報告で優良回答と評価される久保さんがゼミ生に講義（ワークショップ型の授業）を行った。しかし、なぜ久保さんが先生から講師として指名を受けたのか。これは久保さんが先生の教えの方法のポイントをとらえているからである。先生の方法を踏襲し、実践している。この点で、他のゼミ生の参考になるはずという先生の判断であった。

久保さんが講義で話したことは、次のようなことである。

- ・まず型を学ぶこと。学ぶとは「真似ぶ」からきている言葉である。そこで、まず先生のやり方と行動を真似ることが大事になる。
- ・10月のゼミは、久保さん自身は欠席であった。しかし、出席していなかったから自由に書けたという面もある。とはいえ、自由に書くといっても、それは自分の感想や根拠のないことを漫然と書くことを意味するのではない。あくまでも、これまで先生が出されたゼミ資料に基づいて書いている。この意味で、これまで先生の述べられたこと、やってこられたことを書いただけである。
- ・久保さんは、先生のやっておられることの例として、たとえば漢字とひらがなの使い分けをあげた。先生は「みる」と「見る」の使い分けや、「取り組み」を「取りくみ」、

「求める」を「もとめる」など一貫して使い分けている。このことに久保さんは気づいた。つまり、先生は、文章を書くときに漢字とひらがなの使い分けなど、ほとんどの人が気にしないことにも注意して書いているということである。

久保さんは10月の定例ゼミには出席していなかった。にもかかわらず、久保さんの提出した「10月のゼミ報告」は、出席したゼミ生よりも的確にとらえて書いている。他のゼミ生の提出した提出物は、多くが報告書の様式をとっている。このかたちでは、ゼミ全体のスケジュールや配布物など午前中のゼミと関係のない余分なものが入ってくる。久保さんの宿題回答は、そのようなものは入っておらず、他の人の回答と基本的な構成からして違う。先生の宿題の意図を的確に読み取り、提出物としている。

久保さんは、大阪のツアーの報告書でも書いているが、あべのキューズモールに向かう途中、先生との会話から先生がなぜ同モールの店内マップをじっと観察したか聞いている。先生は、店内マップをみることにより、外形的な面からモールの特徴をつかむことを実践していた。ここに気づいた。

先生は基本行動が違う。では、その基本行動を他の人ができるかという、いきなりはできない。自分で実際にやってみて消化吸収しないと、できるようにはならない。実際にやってみるとは、たとえば、10月の第2ゼミでは図書館法の位置づけについて検討した。この話題を受け、看護師であるゼミ生の文さんは、看護師法に置き換え、実際に自分で調べてみた。実際の行動で真似て試してみることが、基本行動を身につけることにつながる。

基本行動とは、たとえば、配信された資料をファイルするとか、見出しをつけるとかの些細な行動である。一つ一つはまったくむずかしくないことである。しかし、これも習慣化するのには容易でない。そもそも普通は、こうしたことを一度にやろうとする。だから時間もかかり、できなくなってしまう。そこで、その場で付箋をつけるなど個々の行動を小さく分解してその場でできる行動にする。これをその都度やるようにするのが習慣化のポイントである。

### 3. M2生修士論文レジメの検討

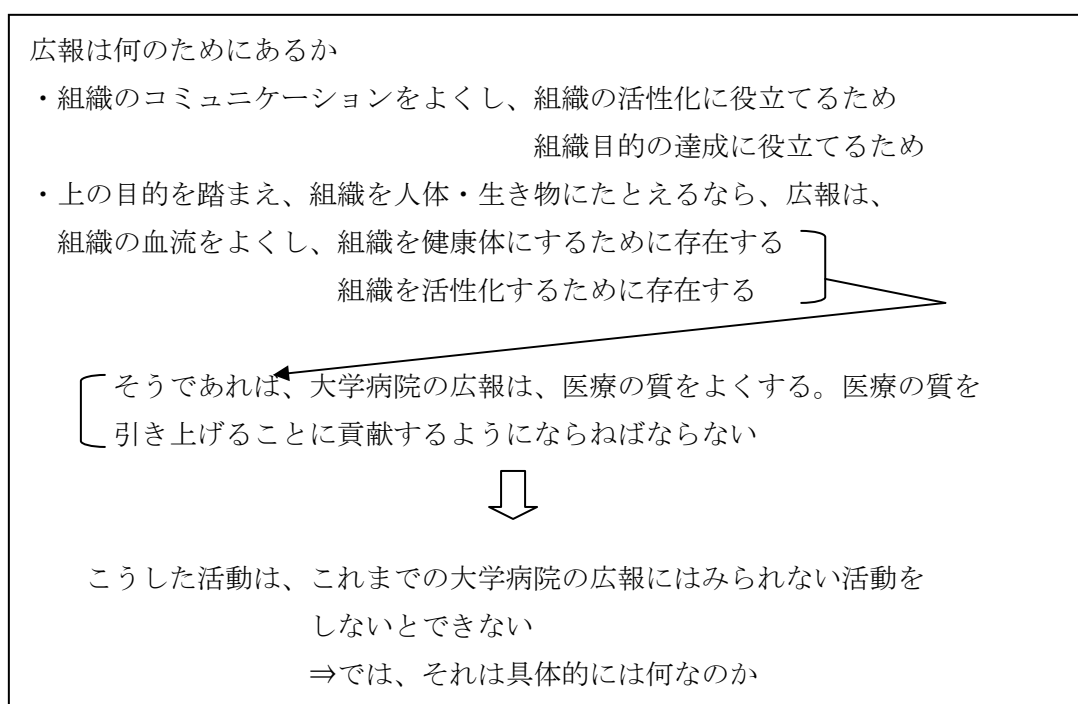
#### (1) 先生による久保さんの論文へのコメント

- ・目次の柱の量が多く、目次の一文が長い。柱が多いと、何が言いたいか不明確になる。あれもこれも入れようとする、論旨はパンクしてしまう。個人としていろいろな思いはあるにしても、これらを消化して、論点を絞ったほうがよい。ゼミ生全般にいえることだが、不備な点を事前に自己チェックできる力をつけてほしい。9月ゼミのレポート構成を軸にして、もう一度構成を再検討するのがよい。
- ・表題が、「広域自治体職員のモチベーションアップに向けて」となっている。だが、「広域自治体」とは何か分からない。

- ・表題にカタカナ語が入ることは、あまり好ましくない。どちらかといえば、避けたほうがよい。
- ・表題では「・・・に向けて」となっていて言い切りになっていない。半終止形のかたちである。これは何となくとか、あいまいな印象を与える表現になる。

## (2) 早川さんの論文について

先生が「病院の広報」について板書された。以下に記す。



指摘事項としては

- ・メインタイトルとサブタイトルがついているが、サブタイトルはできればないほうがよい。これは入れるとするなら、表記的には、メインタイトルとサブタイトルの行間を狭めること。
- ・大項目ごとの区切りでは、スペースを空ける。
- ・タイトルはこのくらいでよい。今までよりはだいぶよくなっている。

## (3) 神谷さんの論文について

- ・どの属性の株主の持株を高めたかを措定することで、上場目的を明らかにするとしている。しかし、これだけでは、IPOで新規に持株が増加した株主を単にアンケート的に分類したままで終わることになる。
- ・論文には謎を解くという意味で、ストーリー性をもたせる必要がある。これにより、何を明らかにするかが明確になる。

#### (4) 野崎さんの論文について

- ・ 一見して「経済論的アプローチ」である。経済論的アプローチが悪いというのではない。しかし、素材・材料のとらえ方が吟味されていないので、事実を押さえたことにならない。茫漠としたとらえどころがないままで終わってしまう。
- ・ 技術流出について、経済産業省の調査や『ものづくり白書』等に依拠している。しかし、これらの資料における調査を少し吟味するならどうであろう。それらの調査報告書における図表の縦軸、横軸は何を示すのか。図表の注で書かれているデータ出所をみると、いずれも根拠としてはかなり危ういものが多い。これだけでも、論文で根拠資料とするには不十分であることがわかる。

#### 4. 11月定例ゼミについての感想

11月の定例ゼミでは、久保さんの宿題回答が10月ゼミに出席していないにも拘わらず、ゼミに出席した者より、ポイントを押えたものになっていた。また、ゼミの中のワークショップで行った久保さんの講義のレベルの高さについて衝撃を受けた。他のゼミ生(M2生も含めて)も同様の感想であった。いかに先生の話の的確にとらえ、真似して、実践することが大切かをつくづく実感した。

以上